

2008（平成20）年6月13日

陳述書

佐野敦至

私は、1979年から教員として働いております。30年近くにわたり、本務校の福島大学やその他いくつかの大学、教育機関において外国語科目としてのフランス語、言語学としてのフランス語学あるいは「言語と社会」といった講義を担当してきました。授業を通じて学生に、個々の人間社会は共有する言語という手段によって豊かな文化を育んできた、他者の文化、他者の言語に対する敬意を忘れてはならないということをメッセージとして発信し続けてきました。言語の学習によって異文化理解を深めることは、現在さまざまな意味で困難な状況に直面している地球、人類にとってますます意義のある営みとなってきていることは疑いを容れないと確信しております。

しかるに、石原知事は公人として公衆の面前でフランス語を罵倒しました。私は怒りを乗り越えた悲しさを感じました。何の文化的素養もない三流政治家の発言なら、特に気にとめることもなかったかもしれません。しかし、知事と文化とは切っても切れない関係にあるはずで、そのような方の発言がいかにか人を傷つけるか、他者の心情に思いを致す余裕はないのでしょうか。さらにその矛先はフランス語を教育・研究する都立大学の同僚たちにも向けられました。名指しされていないとはいえ、知事の発言がだれに向けられたものかは明確です。そしてその延長線上には、都立大学以外のフランス語・フランス文学研究者たちが意識されていると想像することは容易であり、私もまた「そういうもの（フランス語）にしがみつくと手合い」の一人と思われているのかと考えると、自らの長年の努力を一瞬にして全否定されたような苦痛を覚えるのです。

私は決してフランス語、フランス語教育研究者だけがその価値を認められれば良いと考えているわけではありません。世界のあらゆる言語・文化が尊重されるべきときに、今回のような発言が看過されてはならないと考え、原告に名を連ねているものです。適正な判決が下されるよう、心より望みます。